六甲山魅力再発見市民セミナー

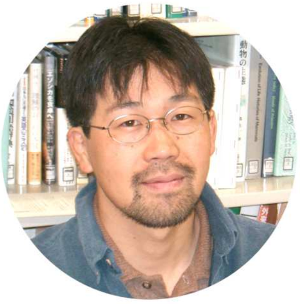
市民セミナーVol.33
六甲山での野生動物との
共存を考える/坂田 宏志
2005年12月発行

第33回テーマ：六甲山での野生動物との共存を考える

クリスマスムードが
あふれる里見ホール

講演内容
①野生動物たちの今
②人と野生動物の適切な関係とは？
③自然環境の恵みと保全を考える

実施日：平成17年12月10日（土）
午後1時00分～3時45分
場　所：六甲山YMCA 里見ホール



講師：坂田（さかた）　宏志（ひろし）さん

プロフィール
１９６８年生まれ。京都大学農学研究科博士後期課程修了。農学博士。現在、兵庫県立大学自然・環境科学研究所助教授、人と自然の博物館主任研究員。兵庫県森林動物共生室係長兼務。

久しぶりの六甲山ＹＭＣＡ

今月より来年３月まで六甲山自然保護センターが冬季休館のため、会場を六甲山ＹＭＣＡの里見ホールに移しました。当日は快晴ながらも朝の気温は２度と低く、散策道は雪が残っていました。
講演の前に講師の坂田宏志さんとご一緒に昼食懇親をしました。里見ホールの暖炉に火を入れると同時にサツマイモを火の中へ。焼き芋の出来上がりを楽しみにしつつ、講演を始めました。

雪道を歩きながらのボランティア清掃

兵庫県の野生動物対策について理解できた

坂田宏志さんは、県立人と自然の博物館の主任研究員で、兵庫県の野生動物対策にも取り組まれています。講演では２０００年に六甲山の周辺をツキノワグマが徘徊した事例や、現在兵庫県が実施しているツキノワグマの学習放獣についてご紹介いただきました。自然のバランスが崩れている実態や生態系の仕組みを、図解を用いて分かりやすく解説していただきました。

六甲山にいる野生動物の実態を知った

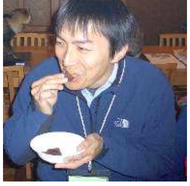
六甲山にいる主な動物を紹介いただきました。タヌキの特徴をはじめ、話題となっている「イノシシ条例」やペットで飼われていたアライグマなどの外来生物の存在を確かめました。質疑応答では様々な意見が飛び交い、適切な関係で共生していくにはどうすべきかを考えました。

野生動物への愛情と責任を正面から考えたい

今回のお話で、野生動物の本来のあり方と我々の関わり方について考えさせられました。そして野生動物対策をしてくれる人がいるおかげで私たちは生活できているという事実を見直しました。動物への愛情と責任について私たちはどう関わるべきかを正面から考えたいと思います。

※詳しくは、１．２ページをお読みください。

参加の感想　七目木　修一さん



兵庫県内の野生動物について現状を分かりやすく説明して頂きました。特にツキノワグマが人里に現れる回数と森の木の実の豊凶の関係が分かりやすいものでした。また、野生動物、外来種について、人が自然を理解しないと彼らを傷つけることにつながるのですね。勉強になりました。
ところで、自然からの贈り物、休憩時間の焼き芋はおいしかったですね。

主催：六甲山自然保護センターを活用する会
協力：兵庫県立人と自然の博物館
後援：兵庫県神戸県民局 灘区役所 神戸市教育委員会

【助成金をいただいている機関】
（財）大阪コミュニティ財団（東洋ゴムグループ環境保護基金）、（財）ひょうご環境創造協会、コープこうべ環境基金、灘区役所「地域力を高める」事業助成

テーマ：六甲山での野生動物との共存を考える

第３３回市民セミナーの流れ

市民セミナー
１．昼食懇親：１２：１５～１３：００
２．あいさつ：１３：００～１３：１０
３．講　　演：１３：１０～１５：３０
４．質疑応答：１５：３０～１５：５０

講演
①野生動物たちの今
②人と野生の適切な関係とは？
③自然環境の保全と恵みを考える

昼食懇親

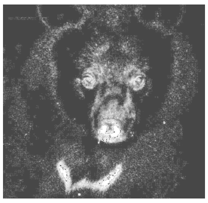
講演の挨拶（坂田宏志さん）

坂田宏志さん

野生動物、特に農業被害・人身被害など、社会的な課題の多い大・中型哺乳類の研究をしています。六甲山については皆さんにも教えていただきながら進められればと思います。

講演内容

１．ツキノワグマ


ツキノワグマ

■ツキノワグマの生態

ツキノワグマは日本に１万頭ぐらいといわれているが正確にはわからない。地域的には絶滅が危惧される一方で人身事故も起こるので対策が難しい動物である。兵庫県では北部に生息している。２０００年には六甲山系にも出没し、３ヶ月も徘徊した。六甲山でも暮らしていけるということで、また、出没するかもしれない。

■クマと人の関係の変化

昔は狩猟もしていたし、クマは人間を怖がっていた。今、過疎化や高齢化が進む農村では、クマが出てきても何もできないことが多い。クマが人間を恐れず集落に出てくる頻度が高まると、人身被害の危険も高まる。

クマから逃げると

クマがやってきてしまう

■クマへの対策

今までは、クマの出没に対し、何もしないか、殺すかのどちらかしかなかったが、兵庫県では段階的な対応を取るようになった。具体的には、１．山中などの目撃では注意喚起。２．里に出てくる時は、誘因物の除去や防護。３．それでも出てきたら追い払う。４．それでも出てきたら一旦捕獲して学習（お仕置き）放獣。５．それでも効果がなければ捕殺、という段階を踏む。

■学習放獣

学習放獣の様子

学習放獣とは、集落に出没するクマを捕まえ、おしおきをして人里に来てはいけないことを学習させ、山に放すこと。昨年、学習放獣を行ったうち６頭は再び出没することはなく成功だったが、３頭は再度出没してしまいその内１頭は捕殺された。一方でイノシシのワナに間違って捕まったなど被害を出していないクマは、放獣しても人里には出て来なかった。このような結果を踏まえて対応を改善しなくてはいけない。

２．イノシシ

■六甲山以外では人身被害はない

丹波や但馬地方ではイノシシといえば「農業被害」と「ぼたん鍋」のイメージ。六甲山ではイノシシに指を食いちぎられたり、追突されたり、といった「人身被害」もある。実は人身被害があるのは六甲山だけで、丹波但馬では一切ない。

■イノシシ餌付け禁止条例

餌付けによりイノシシが人に慣れ、接触する機会が増えて人身被害を起こすようになった。神戸市はイノシシの餌付を禁止する条例を作った。罰則規定はないが、関係者の努力で餌をやる人は減っている。しかし、人の迷惑を考えず餌付けを続ける人がいるので、被害に遭う人は罰則を求めている。本来は法律で縛るよりも、地域で適切な動物との関わり方を実現するのが理想だが、必要なことが守られないのであれば規制も仕方がない。

■野生動物はペットではない

野生動物は、自然の中で餌をとるようにできている。人間の食べ物を与えると動物は喜ぶが長い目でみると野生動物にいいことはない。自然の中で餌を捜さなくなり、人間で言う成人病にもなる。人身事故が起きれば駆除されることになる。子供のイノシシはかわいいが、一生面倒を見て、被害の防止や補償をするつもりがないのなら、餌はやるべきではない。小さくて追い払いやすいうちに、追い払ってやるのも愛情だと思う。

ブタのように太り、毛が薄くなったイノシシ

３．アライグマと野生生物との共存の課題

■アライグマ

北米からペットとして入ってきた外来生物。全国各地で数が増えている。見た目はタヌキと似ているが、５本指で物を掴め、手先が器用で色んなことができる。

アライグマは指が５本

左アライグマ右タヌキ　そっくり！

■外来生物法が施行された

２００５年の６月に「外来生物法」が施行され、アライグマなどの特定の動物は飼うことも、放すことも禁止された。一度放されると影響も大きいので、罰則は厳しい。アライグマは根絶を目標に対策が行われることになると思うが、多くのアライグマを捕獲して殺すことになる。もし、これほど広がる前（８０年代）に対策ができていれば、殺さなければならないアライグマは少なかっただろう。

■野生動物の生息状況

山が荒れてきたから野生動物が人里に出てきたという人がいる。戦後からの地図や航空写真を見比べると、森林が回復した所もあり一概に山が荒れているとは言えない。自然環境や植生は、人と野生動物の関係に大きく影響するので、正しく現状を把握した上で対策を考えないといけない。

■生態系の仕組み

どんな生物も生態系の中で何らかの効果や影響を及ぼしている。ある生物が増えれば、別の生物が減ることもある。野生動物の死体のおかげで、死体食者や分解者、植物が生きている。生物資源や栄養分の循環、空気や水の浄化など、生態系機能は人間に様々な恩恵をもたらしてくれる。

■野生動物との共存の課題

まずは相手をよく知ることが必要だ。その上で被害対策として、農作物等を守り野生動物の人慣れや里慣れを防ぐ。一方で、自然環境を保全して野生動物の生息環境の確保を行っていく。そして、動物によっては分布や個体数の増減を管理することも避けられない。野生動物との共存のための社会的な合意や体制作りも必要だろう。

まとめ（坂田さん）

動物を殺すことは良いことでしょうか、悪いことでしょうか？私たちは、動物の肉や毛皮を利用します。動物を殺さずに米や野菜をつくることもできません。人の生活や他の生物に悪影響を与える動物たちもいます。誰かが自分の代わりに動物を殺してくれているおかげで、生活できていることは忘れてはいけないと思います。相手をよく知り、人間同士がよく話し合い、いやなことからも目をそむけないことが必要だと思います。

そして、熱のこもった質疑応答

ツキノワグマを集落に近づけないために、餌として山にドングリを撒くのには疑問がある。…

山田良雄さん

野生動物が悪いことをするといって殺したらいいという気持ちにはなれない。…
私には２匹のアライグマの友達がいる。…
六甲山というエリアは野生動物と一緒に生活しているところだ。…

矢野文敏さん

事務局より

「動物を殺したい人は誰もいない。誰かの代わりに殺してくれる人がいて私たちが生活できる。」というお話が心に響きました。生命を大切にすることと、野生動物との共存という難しい課題に直面しました。

◆参考・配布資料など

- レジュメ
- スライド
- はく製・標本
  アライグマ、タヌキ、アライグマの骨格

博物館から持ってきていただきました。→

兵庫県立人と自然の博物館
〒669-1546　三田市弥生が丘６丁目
TEL：079-559-2001　FAX：079-559-2007
URL：http://hitohaku.jp/　Mail:root@hitohaku.jp

◆参加者の声～アンケートより～

- 生息状況や生態系の実態把握が必要なことが分かった。栄養の循環（海と山）が理解できた。
- 自然（動植物）がうまくかつ厳しく関係を持ち共生していることが分かった。
- 里見ホールは趣があるが、寒かった。
- 中川さんのつくられた焼き芋がおいしかった。

◆参加者：２１名（順不同・敬称略）

坂田　宏志	村上　定広	久保　紘一	浅井　審一
八木　　浄	澤田　　中	北山健一郎	泉　美代子
山田　良雄	小坂　忠之	石田　澄子	矢野　文敏
福永　一登	高光　正明	大上　卓男	七目木修一
中川　典夫	堂馬　英二	中川貴美子	堂馬　佑太
菖蒲　美枝			